

令和3年度 厚生労働科学研究費補助金(認知症政策研究事業)  
併存疾患に注目した認知症重症化予防のための研究

分担研究報告書

高齢者の処方傾向の推移 調剤薬局の処方データ比較(2019-2020)  
COVID-19流行による処方内容への影響について

研究分担者 鈴木裕介 名古屋大学医学部附属病院 地域連携・患者相談センター

研究要旨

本年度の研究においてはCOVID-19流行前後の高齢者に対する処方動向の把握を目的として2019年11月と2020年11月の各1か月間の調剤薬局の処方内容の解析を行った。全国の調剤薬局において65歳以上の高齢者に対する処方薬剤数 特に慎重を要する処方: Potentially Inappropriate Medications (PIMs)に該当する薬剤の数について2か年の比較を行った。2019年11月と比較して2020年(COVID-19流行後)においては平均薬剤数 PIMs該当薬剤数ともに有意な増加傾向を認めた。薬剤数については処方日数の増加との順相関がうかがわれ、PIMsの増加についてはその内容について更なる解析を要するが今回の増加傾向は看過できない傾向である。

A. 研究目的

昨年度の2014年と2019年の処方内容の比較により平均処方薬剤数(ポリファーマシーの頻度)は減少していることが確認された一方、PIMsの頻度は増加しておりその傾向は高齢になるほど強いことが確認された。またPIMsと関連する薬剤の多変量解析を年齢階層別に比較したところ、関連する薬剤の増加が85歳以上の超高齢者においてもっとも大きいことが確認され、加齢による多病化の進展がPIMsの処方に大きく関連していることを示唆した。本年度の研究においては、2020年初頭より社会に多大な影響を与えたCOVID-19の全国的流行が高齢者の処方に与えた影響と認知症の有無による影響の差異について、2019年11月(流行前)と2020年11月(流行後)の1か月間の処方を比較することにより検証した。

B. 研究方法

全国の調剤薬局のデータベースの65歳以上の処方箋記録から年齢、性別、処方薬剤数、日本老年医学会の高齢者に特に慎重を要する薬物リスト(JGSリスト)のPIMs)に含まれる薬物(用量)に該当する薬剤の処方状況とそれと関連する属性の比較を行った。2019年11月1日~30日、2020年11月1日~11月30日の各1か月間に全国の処方箋調剤薬局チェーンで調剤を行った全ての65歳以上の患者を対象とした。処方薬剤数、PIMsに該当する薬剤数について2019年と2020年の比較を行った。

(倫理面への配慮)

対象となる高齢者に対しては研究の主旨を説明した上で同意を取得した。個人のデータは匿名化を行い守秘義務に対する配慮を行った。本研究は名古屋大学医学部生命倫理委

員会において承認を受けて実施された(承認番号:2019-0356)

### C. 研究結果

29,493名(2019年)と333,070名(2020年)の65歳以上の患者が調査対象となった。患者平均年齢は増加が観察された:76.3歳(2019年)→76.6歳(2020年) $p<0.001$ 。平均処方薬剤数はすべての年齢群において有意に増加:3.64剤(2019年)→4.00剤(2020年) $p<0.001$ 。一方、PIMsに該当する薬剤数、処方比率も2.21剤(60.7%)(2019年)から2.44剤(61.0%)(2020年) $p<0.001$ とCOVID19流行前と比較して有意な増加が観察された。

### D. 考察

前年報告した2014年と2019年の5年間隔を置いた比較においては、平均薬剤数、ポリファーマシー比率ともに減少が確認されたのと対照的にCOVID19流行前後においては明らかな増加が観察され、同様の傾向はPIMs該当薬剤にも観察された。処方数増加の背景としては、COVID19流行に伴う受診抑制によって一回あたりの処方日数が増加したことにより、処方日数と処方薬剤数の順相関作用が影響した可能性が推察される。PIMsの処方増加傾向は、前回の5年間隔の比較調査においても顕著に観察されたが、今回の調査においても同様の増加が認められた。平均年齢も年々増加傾向にあり、患者の高齢化による多病傾向がPIMs該当薬剤の処方確率を一層高めている可能性を今回の調査は示唆するものであった。本来ならば受診抑制による来院患者数の減少は、出来高払いの原則により減少ベクトルの作用し易い診療時間に少しでもゆとりをもたらす、処方の適正化を行う余裕を処方医に

与える効果を期待したが、実際の処方実態においてはそのような希望的観測を支持する証拠は確認されず、むしろ処方数、PIMs(処方比率)においては高齢者の安全な薬物療法という観点からは懸念される傾向が観察されるに至った。令和4年度の診療報酬改定において明記されるに至ったリフィル処方制度が、高齢者における処方適正化のための仕組み作り(診療の質向上および医薬連携による処方Review機会の創出等)に資することが期待される。次年度は今回の比較調査の内容をさらに詳細に検討し、処方数、PIMs増加と関連する要因(薬効別、基本属性との関連性の検討など)を精査することにより、ますます患者の高齢化が進展する外来診療において、感染流行による受診抑制から得られた知見を今後の診療における処方の適正化のために必要な要素について考察を加えることを予定している。

### E. 結論

全国の調剤薬局の65歳以上に高齢者の処方内容をCOVID流行前後の2時点に置いて調査し、結果を比較した。平均年齢の増加、処方薬剤数およびPIMsに該当する薬剤数、PIMs処方比率において流行前からの増加が観察された。処方数の増加は、感染流行にともない観察された受診抑制が受診時における処方薬剤数の増加をもたらした(診療間隔と処方数の相関)可能性を示唆する。PIMs処方数、処方比率の増加は患者の高齢化による多病の進展が背景に存在すると考えられた。

### F. 健康危険情報

本研究に関して健康の危険に関する情報はない

G. 研究発表

1. 論文発表

1. Suzuki Y, Shiraishi N, Sakakibara M, Komiya H, Akishita M, Kuzuya M. Potentially inappropriate medications increase while prevalence of polypharmacy / hyperpolypharmacy decreases in Japan: a comparison of nationwide prescribing data Arch Gerontol Geriatr (in press)
2. Umegaki H, Suzuki Y, Komiya H, Watanabe K, Nagae M, Yamada Y Impact of sarcopenia on decline in

quality of life in older people with mild cognitive impairment J Alzheimer's Disease (in press)

3. 2. 学会発表

1. 鈴木裕介、小宮仁、白石成明、榊原幹夫、葛谷雅文 調剤薬局における高齢者処方内容の推移 2014年と2019年の比較 第63回日本老年医学会学術集会 2021年6月11日 名古屋

H. 知的財産権の出願・登録状況(予定を含む)  
なし